

三位一体の主日 2014.6.15

## イエスとニコデモ

ヨハネ3章 16-18節

3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

3:18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。

-----

「いいかげん」ということばはよく悪い意味でつかわれますが、いい湯加減といういいまわしもあるように、ちょうどいい塩梅という意味にもなります。ところで三位一体はキリスト教の難しい教理といわれています。神は唯一だけど、神の子（イエス・キリスト）聖霊という三つの位格において永遠に存在するという内容です。この教えはどの教派でも難解とされていて、理解するものではなく信じるものと説明されたりします。こういわれるとそうですか、としかいいようがありません。三角形の内角の和は180度である（ユークリッド幾何学の公理）わたしは父子聖霊なる神を信じる、教理というものはそういうものです。それでも三位一体を考え続けましょう。内角の和が180度という公理も非ユークリッド幾何学では公理としては扱われません。三位一体もこの世の終わりの日、イエス・キリストの再臨の日には古い教理となるかもしれません。疑いつつ信じるという態度を自分の中からしりぞけてはなりません。わたしは最近では「いい、かげん」に三位一体をとらえられるようになってきたと感じています。厳密に神はただひとつとするという窮屈になってきます、三位一体という教えはこの窮屈さを超える教えでもあるのかなあとぼんやりと思っています。

先週でペンテコステの祝日がおわり、教会の暦では通常（緑）の期間が始まります。イエスの生誕に始まり昇天、聖霊降臨で終わるシリーズが終了してまた日々の歩みが始まります。その初めの主日に三位一体をテーマにするのは意義のあることに思えます。

きょうのテキストはルターによれば聖書の中の聖書、小さい聖書といわれているヨハネ福音の3.16を含んでいます。だれかに聖書の内容を一言で説明してといわれたときにこの箇所を引用して置けば間違いないといわれている箇所です。

3章16節は飾りを省いて短く言えば「神は世を愛された」となります。愛した証拠として「独り子（イエス）を与えた」その理由は「信じる者が永遠の命を得るため」ということになります。

短いことばですが、ルターの碧眼のとおり聖書の要約といえる箇所です。余談ですが自分の誕生日、生まれ月を章、月日を節にあてはめて聖書のいろんな章を見てみると楽しいですよ。ただの遊びですが一度挑戦してはいかがでしょうか。

世とはなにか、愛とはなにか、独り子を与えるの意味は、永遠の命とは、それぞれに深い意味があります。世とは人間たちのこと、愛とは関係、イエスを与えるとは人間の身代わりとしての死、永遠の命とは神との交わりにはいること、一例ですがこんな答え方をすることもできます。聖書を読む、聖書に聞くとは、とどのつまりはどのように解釈するかということになります。聖書を解釈する、人が解釈するのではなくて自分が解釈する、もちろん解釈を独力ですることは難しいことです。教えてもらいながら、ともに学びながら聖書のみことばを自分も血肉のものにしていく、それをわたしたちの日々の暮らしの中で実現していく、それが信仰であり、わたしたちの目標となるものでしょう。きょうはわたしのへたな解釈をひかえて、シンプルですが力強いみ言葉、3章16節でむすびとします。

**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。**

さいごに背景についてコメントを付記します。

ヨハネの3章 1-15 まではイエスとニコデモ（ファリサイ派の議員）との対話になっていますが、16 節はイエスのことばか、それとも福音記者ヨハネのことばかという論議があります。新共同訳聖書ではイエスのことばとして「」で括られイエスのことばとしていますが、16 節以下はヨハネのことば（地の文）という見方もあります。福音のことば（イエス本人のことば）と宣教のことば（教団の教え）渾然一体となっているところにヨハネ福音書の特徴があることから3章 16 節以下は地の文として受け取る解釈のほうがいいとおもいます。

-----